



おぢばで人は成人する



年祭活動2年目を迎え、おたすけ推進のつどいを開催した（1月24日）

真明

発行所
天理教芦津大教会
〒546-0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話 06 (6702) 1980
FAX 06 (6700) 1854
Eメール shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所 天理時報社

元のぢばや親里や、日々送る元のぢばや親里
やと、世上からおざやかなと言うように、治
め暮らしてくれるよう。
明治21年11月14日

おぢばには高校、大学、教校などの学校があります
が、その他にも修養科、ようぼくや教人の講習会、学
生生徒修養会など、さまざまな学びの場があります。
春になって、おぢばで新たな一步を踏み出す若い方も
多いでしょう。

おぢばに帰れば、信仰を同じくする仲間が周囲に大
勢います。共にひのきしんに励み、身上の方におさづ
けを取り次ぎ、人のたすかりを願って真剣におつとめ
を勤めるなど、仲間と共に信仰を実践する中で、考え
方の基本や信仰姿勢が自然と身につきます。そして何
より、親神様、教祖が常に側におられます。神殿に足
を運べば、嬉しい時もつらい時も実の親として温かく
包み込んでくださいます。お道の雰囲気包まれなが
ら、おぢばでしか味わえない貴重な体験を得て、「人を
たすける心」を育み、大きく成人していくのでしょうか。
教祖年祭に向かう旬だからこそ、多くの方をおぢば
へお連れしたい。真剣に道を通る姿や、親心溢れる温
かい雰囲気味わい、勇んでもらいたい。そのために
も、多くの方をおぢばへと導く努力を積み重ねたいと
思います。

正面方加

先日夜、本部神
殿で参拝を終え、
靴を履こうとす
と、ネックウオー
マーがないことに
気付いた。慌てて
回廊を探したが見
当たらない。教祖殿まで戻り、
境内掛に尋ねると、すぐに巡
回の掛員が持ってきてくださ
った。お礼を申し上げながら
ふと思った。「教祖が『戻っ
ておいで』とおっしゃってい
るのかな」と。

私たちの身の周りに起こる
ことは、どんな些細なことでも
すべて神様がなさること。
たとえ自分にとって不都合な
ことでも、そこには親神様、
教祖の「陽気ぐらしをさせて
やりたい」との親心が込めら
れている。手の擦り傷も、子
供の発熱も、忙しいときに用
事が重なるのも、すべて陽気
ぐらしへの温かいメッセージ。
教祖に改めてお礼を申し上げ
「もっとお喜びいただける
よう、毎日を通していただ
きます」とお誓いして帰路に
就いた。

《春季大祭 神殿講話》

教祖の道具衆としての自覚をもつて
心定めをやり切る努力を

本部員 島村廣義先生

地震というお知らせ

教祖百四十年祭活動2年目に入りました。1年目の成果の上に立って、2年目はさらに一歩前進させていきたい。そういう心を定めて迎えたわけですが、どうしたとか、1月1日、「能登半島地震」という大節を親神様からお見せいただきました。この大節に遭われた皆様方に対して、心からお見舞いを申し上げます。

この地震に対して、親神様のお急き込みは何なのかということをお考えにはおれませんでした、真柱様は年頭のご挨拶の中で、地震について言えば、おふでさきでは、天災を月日の残念、立腹と仰せられているのはご承知のところでしょう。それは、教

祖の教えを信じ、教祖の道を通していただくお互いの、心の成人の鈍さに対する厳しいお仕込みであると思うのであります。『みちのとも』立教187年2月号 5頁

とご指摘いただいたのです。そして続いて、

年祭活動の二年目を迎えました。厳しいお仕込みに対し、どの点をお知らせくださっているのか、いろいろと振り返り、思案して、気づいたところがあれば改めて、歩みを進めることだと思ふのであります。 同前

と述べくださり、
三年千日は、立教一八九一年二月二十六日のための準備期間ではなく、もうすでに本番であります。普段よりひながたを強く

意識して毎日を通る。昔から、非常時と言われますが、普段とは違う緊張感を持って歩む時であって、いまは何をしなければならぬ、いまだ何をしていかなければならぬ、各人の立場で何をしなければならぬかを見失わずに、年祭への活動を着実に進めていかなければならないと思うのであります。

(中略) 関わる人がしっかりと心を通わせて、一日も早く立ち直るご守護を頂けるようにとめてくださるようお願いしたいと思ひます。

また、年祭へ向かって歩もうという、その気持ちを持って歩む人を一人でもご守護いただく、そのための丹精もしつかり進めていただきたいと思ふのであります。 同 5頁7頁

と仰せくださいました。

これから歩みを進めていく上で一番の中心、心の定め方をお諭しいただいた、昨年秋季大祭の真柱様のご挨拶の中で、特に私が心にあることを思案してみたいと思ひます。

道具衆のお働き

昨年の秋季大祭で真柱様は、……まず教祖は、五十年もの間、どんなことが起こっても諦めることなく、丹精し続けられたということ、これを、これもひながたと忘れてはならないことなのではないか……

『みちのとも』立教186年12月号 6頁7頁

とお諭しいただいた上で、ようばくについてお話をくださいました。

よふばくは教祖の道具衆であります。元初まりに、親神様に呼び寄せられた道具衆が、親神様のお心に溶け込んで、お心通りに動いて、人間創造のために役立たれたように、私たちは教祖のお心に溶け込んで、教祖のお心通りに素直に実行して、たすけ一条に励ませていただくことが使命であることを、あらためて確認し合いたいと思ひます。

と仰せになったのです。

同 7頁
二代真柱様のご著書に『道具衆』

という本がありますが、その中に道具衆の 2 つの意味が取り上げられています。

元初まりのお話の中で、親神様が八つの道具を用いて人間をお創めくだされました。そのとき親神様のお手伝いをした八つを指すのが、道具衆の第一の意味です。

かぐらづとめを結界のそばで参拝させていただくと、親神様に一手一つに溶け込んでお勤めくださる様子がよくお分かりいただけると思います。

くにとこたちのみこと様、をまたりのみこと様は、北と南に位置してお勤めくださいますが、これは親神様の理。いわば親神様そのものです。

そして、あとの道具衆が「親神様に溶け込む」とは、このかぐらづとめの中でどう表されているのか。くにとこたちのみこと様のかぐら面には尾が 1 本付いていて、たいしよく天のみこと様に結ばれています。をまたりのみこと様には尾が 3 本付いていて、くもよみのみこと様、かしこねのみこと様、

をふとのべのみこと様に繋がっているのです。

そして、親神様に直接結ばれていないお立場の方々は、いざなぎのみこと様、いざなみのみこと様です。なぜ結ばれていないかという、元初まりのお話の中で、親神様にひとすじ心であるということ、勝手な動きをしない、親神様の思いそのままに付き従って行動される方ということで、結ばれていないわけです。そして、月よみのみこと様とくにさづちのみこと様は、親神様が食べてしまわれて、その心根を味わい、その性を見定めた上で、いざなぎのみこと様、いざなみのみこと様の中へ仕込んで一体化しておられる。そこへ親神様が入り込んで守護してくださるということで、月よみのみこと様も、くにしづちのみこと様も、結ばれていないのです。

これで十柱の神様、全てが一つになっているのですが、十柱の神様は、かぐらづとめは同じ手振りではありません。それぞれお役目があり、そのお役目を手振りに表

して勤める。全てが親神様に溶け込んで、それぞれのお立場での勤めを果たし切っておられるところに、人間創造の守護が現れて、成り立っているわけです。

例えば、をまたりのみこと様に結ばれているお三方の働きを考えると、かしこねのみこと様は息吹き分けて、呼吸を司ってくださいっています。酸素を吸い込んで血液の中に送り、それを体の隅々まで送り込むわけですが、くもよみのみこと様は、口から物を食べ、食べた物を、かしこねのみこと様のお働きで吸い込んだ酸素と一緒に、それを燃やしてエネルギーをつくり、身体を動かす働きをしてくださいます。そして、をふとのべのみこと様は引き出しの守護で、育てる、成長するというお働きです。食べた栄養分を血液と一緒に身体の隅々まで送り込んで、酸素で燃やしてそれをエネルギーとして、人間は育っていくのです。他にも、くにとこたちのみこと様は水の働き、循環器の働きです。をまたりのみこと様は温みですが、

人間が 36 度 5 分の体温を保っているのは、この二柱のお働きがあってこそなのです。をまたりのみこと様の働きだけでは、体温が上がって過ぎてしまうのですが、水の働きをもって温度を調節してくださるから、36 度 5 分で人間の体温を保ってくださいさるわけです。

それぞれが、それぞれの持ち分の働きをして、そして全てが親神様に溶け込んで、一体化してお働きくださっているが故に、私たちはこうして生きているのです。

教祖の道具衆として

そして道具衆のもう一つの意味は、教祖が月日のやしろとお定まり遊ばして、人間世界に陽気ぐらしをお伝えくださった。しかし人間の心の成人が鈍く、思うように思召の実現がはかどらなかつた結果、身を隠して存命同様の守護を下さるようになりました。存命同様の守護とは、究極には「陽気ぐらしの世をお見せいただく意味」と悟らせていただきますが、その教祖の御用を手伝わせていた

だける者、つまり「ようぼくは教祖の道具衆である」ということが、道具衆の第二の解釈であり、私たちようぼくは、教祖の道具衆であるとの自覚と誇りを持つことが肝心だと、二代真柱様はお示しくだされたのです。

教祖は陽気ぐらしの世界となるようにとのご使命により、人間をお導きくださいましたが、成人の鈍さから親の定命を25年縮めたのだとお知らせくださいました。爾来、陽気ぐらしの真意を世界へ伝える役割はようぼくの御用であり、ようぼくは教祖のお心に溶け込んで、たすけ一条の御用の上に立ち働かせてもらう。これが教祖の道具衆たる所以であり、また私たちのつとめであると、お仕込みいただいているのです。

多くのようぼくが必要

ようぼくにも、いろいろなようぼくがあります。それぞれが自分の徳分、性分をもって寄せ集められています、すぐにお役に立つ者もあれば、これから修理丹精し

て御用に役立つように育てないといけないようぼくもある。

例えば、教会で勤めるおつとめも、地方、鳴物、おてふりの人数を数えると、1人2人では勤められません。おつとめの手を揃えるということ一つを考えても、

よふ木でも一寸の事でへないからに五六十の人かずがほし

七号 23

と仰せになっっているぐらい、親神様、教祖は数多くのようぼくを寄せ、育てる上で丹精にお心を砕いてくださっています。教祖の手足となつて、たすけ一条の御用に勤める人を育てることを、特にお急ぎ込みくださっているわけです。

その道具も、おさしづに、道具々々どのような道具もある。

三年五年目に使う道具もある。日々に使う道具もある。損ねたら破損して使わねばならん。三年五年使う道具でも、生涯に一度使う道具でも、無けねばならん。又損ねたら、破損して使う。日々使う道具、どうでも破損して使わねばならん。この理をよ

う聞いて、内々の処ほんに成程と、これが理やと、その心を定めてくれねばならん。

明治21年9月2日

とありますが、教祖にとつて、使い勝手のいい道具にならせてもらうことが大切です。これは並大抵なことではないかもしれませんが。しかし損ねても、それを修繕してでもお使いくださる道具もあれば、3年5年と先延ばしになつて、やつと一度使ってもらえる道具もある。それでも、なければならぬ道具だとの仰せです。

共に歩んで育てる

教祖がひながたをもつてお教えくださったのは、たすけ一条の道であり、その手立てとしてつとめをお教えくださり、おさづけの理をお渡しくださるようになります。陽気ぐらしの世界に立て替えることをお教えくださったのが、教祖50年のひながたですが、教祖は人材を育てるということについて並大抵でないご苦労をしてくださっているのです。

その上に、おつとめの勤修をお急ぎ込みくださっているわけですが、明治20年1月1日から49日間、

初代真柱様を心に交わされた親神様とのやりとりの中に、その親心を教えていただくことができます。

このときのお仕込みは、教祖がおつとめの実行を台に、我が身思案、人間思案を去つて、神一条に立ち切る自立を人々にお促しくださつた、画竜点睛のお仕込みです。陽気ぐらしの世に立て替えるためのおつとめは、あらゆる人間思案を断ち切つて、神一条で勤めることが何よりも大事であると、お教えいただいているわけです。

丹精とは、一生懸命人を教え導く、育てていくということではなく「共に歩くこと、一緒に歩くこと」が丹精なのです。ただ言うだけでなく、一生懸命一緒に通つて子供を育てていく。

教祖のひながたも、並々ならぬ御苦労を根気強く続けて、私たちを手引いてくださっているのです。私たちも、根気強く、諦めることなく、お互いに声掛けをして、よ



うぼくが互いに手を取り合い、なすけ合って、教祖に少しでも成人した姿をご覧いただけるよう、心して通らせてもらうことが大切だとお教えいただいているのです。

心定めをやり切る

私たち自身も、それぞれ年祭活動を進めるにあたり、心定めをしていただいていると思います。

それを集約して、大教会長様は芦津大教会としての心定めを真柱様のお手元に届けておられます。真柱様は、大教会長様から出された心定めをかんろだいに供えられ、親神様に御守護いただけるよう、

一生懸命ご祈念くださっています。「定めたけど、一生懸命やったけどできなかった」「できるだけのことをやったから、それでいい」というのではなく、親神様とお約束ですから、どうでもこうでも心を尽くし切って、心定めを達成する努力をする。その努力を親神様、教祖はお待ち望みくださっているのだと思うのです。

定めるも定めんも定めてから治まる。治めてから定まるやない。

定めてから治まる。(中略) 定めて掛かって神一条の道という。

明治24年11月3日
 尽した理は将来の理に治まる。

どんな大きいものでも、たゞ心
だけではどうもならん。道のた
め尽し果たした理は、難儀不自
由という理は無い。

また、**明治31年10月31日**の青年会総会で、真柱様は、

親神様がこうしてほしいと望んでおられる時に、それを受け取る側の人間が、いまはこれぐらいいいだろう、ということでは

あれば、親神様は、やはり、それぐらいのご守護しか下さらないのであります。だから、親神様が、こうしたければならないと思召しの時は、どうでもその通りにする心を決めて直ちに実行することが、ご守護を頂戴するための心構えだと思ひます。教祖百四十年祭へ向かういまの時局が、その時であります。

『みちのとも』
立教187年1月号

7
頁

とのメッセージを下さいました。

「これぐらいでいいだろう」と諦めるのではなく、とことん思い詰めて、やり切ることです。

この道は、常々に眞実の神様や
教祖や、と云うて、常々の心神
のさしづを堅くにする事ならば
一里行けば一里、二里行けば二

里、又三里行けば三里、又十里行けば十里、辺所へ出て、不意に一人で難儀はさゝぬぞえ。後とも知れず先とも知れず、天より神がしつかりと踏ん張りてやる程に。

明治20年4月3日

と仰せくださっています。この道

は、全て神の道であり、神が働けばこそ日々の道である、とのお教えです。

心を揃え一手一つに

一人でも多くの人を、この道に引き寄せさせていただく努力とともに、その人たちが道具衆の自覚を持って、教えを実行するようになるまで辛抱強く心を掛けていくこと、また、すでによふぼくになつてはいるが、いまだ一旦休憩している人も、やはり一人でも多く、よふぼくの自覚を持って動いてくれるように働きかけを続ける、その努力もおろそかにならないように……

『みちのとも』
立教186年12月号

7
頁

と真柱様は仰せになりました。

やれる者がやるだけの年祭活動ではなく、みんなが心揃えてやらせてもらう年祭活動です。しっかりとお互いに心を定めて、教祖に喜びいただけるような実を上げられるよう、頑張りたいと思います

(要旨)

《教会長夫妻おたすけ推進のつどい 開講挨拶》

初席者2名以上の御守護を目指し 心勇んで年祭活動に励もう

大教会長 井筒梅夫

目の前の一人を

皆様方には教会長として、またその芯を支える第一人者として、年祭活動に真心を込めておつとめくださいます。ありがとうございます。また今日は「教会長夫妻おたすけ推進のつどい」にお集まりくださいます。ご苦勞様です。

年祭活動の2年目を迎え、この大切な時句の道の歩みを、芦津に繋がる私共一同が、心を揃えて進ませていただきたいの思いから、思案しますところを少しお話をし、開講の挨拶にいたします。

さて、親神様の思召の根本は何でしょうか。それは、人間世界をお創めくださった元一日の思召と、立教の元一日の思召から明らかな

ように、「世界中の人々をたすけあげて、陽気ぐらしの世界を実現したい」ということが親神様の思召の根本です。この思召に沿って歩むことが、お道の信仰です。

おふでさきに、

一寸はなし神の心のせきこみハ
よふぼくよせるもよふばかりを

三号 128

よふぼくも一寸の事でハないほどに
をふくよふきがほしい事から

三号 130

と、大勢のようぼくが必要なんだとおっしゃっています。この思召にお応えすることを、私たち教会長、ようぼくに望まれているのです。

一人の人をこの道に導き、ようぼくに育つまでこつこつと根氣よ

く丹精することが親神様の思召に
適うことであり、親神様がお喜び
くださることにもなるのです。

昨年秋に巡教に向いた教会
で熱心なご婦人のようぼくから、
次のような話を聞きました。

ご婦人のお姉さんが臍臓さいぞうがんになり
ました。そこでこの婦人は、
お姉さんに別席を運ぶことを勧め
ると、姉はこれを素直に聞き分け
て、おちばに帰って初席を運びま
した。そして順調に別席を運んで
ようぼくになりました。その後
に検査をしたところ、臍臓がんが
完全に消滅するという、実に鮮や
かな御守護を頂かれたのです。

このご婦人がお姉さんを別席に
導き、ようぼくにまで丹精をされ
たことが、親神様の思召に適った
のです。親神様の思召に適った
間違いがない。親神様が喜んでく
ださったら間違いのない姿を御守
護くださるのです。

論議に「身近なところから、に
をいがけを心掛けよう」とお示し
くださるように、家族を含めた周
囲には、まだ信仰をしていない人

が大勢います。身上や事情に悩ん
でいる人も大勢おられると思いま
す。こうした人に声を掛けて、ま
ずは目の前の一人の人をおたすけ
することです。

「1教会2名以上の初席者を御守
護いただこう」という年祭活動2
年目の芦津としての目標は、「世界
中の人々をたすけて、陽気ぐらし
の世界を実現したい」との親神様
の切なる親心にお応えさせていた
だきたい、ということに他なりま
せん。一人の人をようぼくへと導
いていくための最初の理の順序で
ある初席に、今年は力を注いでい
きたいのです。

お互いに教会の先達として、に
をいがけ・おたすけに、修理丹精
にしっかりと努め、理づくりと伏
せ込みに誠実を尽くし、そして
この日々の努力が初席者の御守護
に繋がるように、心を揃えて時句
の歩みを勇んで進ませていただき
たいと思います。

ひながたを活かす

さて、昨年のご本年秋季大祭の

神殿講話で真柱様は、「まず教祖は、五十年の間、どんなことが起こっても諦めることなく、丹精し続けられたというのを、これもひながたとして忘れてはならないことなのではないかと思う」と仰せくださいました。

一つのことに取り組んでも、成果が上がらなければ、すぐに別の方策を考えてしまう、根気がなく諦めが早い私にとって、真柱様のこの言葉は、ひながたの道を改めて思案し直す機会になりました。

教祖は月日のやしろとなられた途端に、すぐにでも不思議な御守護を現して、皆からあがめられ、奉られることなどたやすいことでした。そうはなさいませんでした。誰もが迎れるようにと、50年もの年限をかけて、手本ひながたの道をお通りくださいました。

世間の人々が聞いたこともない、見たこともない神様の教えを伝えるために、貧の道中を明るく陽光に勇んで通られましたし、後半はをびや許しを道明けとして、不思議たすけを現わされて、さまざま

な干渉や激しい迫害の中を次々とこの道に引き寄せられ、お育てになつて、ようばくへと導いていかれたのです。

教祖が直接おたすけなさった人は数万人に及びますが、そのうちのほとんどが道から離れていく中、教祖は決して諦めることなく、人々をたすけ続けられ、導き続けられました。その結果、この道の礎となり、教えを各地に伝え広められた一握りの真のようばくが育つてきたのです。

どんな厳しい状況であっても諦めることなく、根気よく丹精し続けられたのが、教祖のひながたです。この教祖のひながたを、私たちがたすけ一条の歩みに活かすことをしなければ、あえて御苦労、御苦心の道を歩まれた教祖に申し訳がない、と思わずにはいられないのです。

芦津部内のある教会長の話ですが、後継者の頃に大教会で青年づとめをしていたとき、「青年は一日に一回、たとえ10分でも20分でもにをいがけに出るように」との私

の話を聞いて、素直に実行したのです。そして、一軒一軒くまなく戸別訪問に廻ったその中のある家の奥さんが、「頑張ってるね」と優しく励ましてくださった。その青年はそれからたびたび、この家に足を運ぶのですが、ある日ご主人が玄関先に出てきて、「天理教の勧誘など二度とするな」と厳しい口調で叱りつけられたのです。あまりの怖さに一時は心が折れかけたのですが、気を持ち直して、大教会の月次祭の翌日にお下がりをつけて、毎月声を掛け続けました。そのうちに後継者は青年づとめを終え、布教に出ることになりました。

その3年後、かつての訪問先の奥さんが、家族の事情から大教会を訪ねてこられたのです。奥さんが言うには、ふらふらと身体が引き寄せられるように、大教会の門をくぐったということです。しかも偶然にも、その後継者が事務所において、久しぶりの再会を果たすことになりました。これをきっかけに奥さんは別席を運ばれ、今も

教会に繋がっておられるのです。

諦めることなくにをいがけを続けたその姿をお受け取りになつて、御存命の教祖がお働きくださったに違いないと思います。

こうした話はあちこちにあると思いますが、たすけ一条の道の御用は、とにかく根気よく続けることが大切です。

おつとめに勇む

今年は初席者の御守護を目標にしましたが、初席を運んでもらったらそれで終わり、というわけにはまいりません。その人をようばくへと導いていく丹精が必要です。一人の人をこの道に導いて、心を掛けておたすけをし、丹精を重ねながらようばくへと導いていくことは、並大抵なことではないと思います。だからこそ、教祖のひながたを手本にして、教祖のお心を受けて、根気よく丹精をし続けていきたいのです。

ところで、この度の年祭活動は、それぞれの教会でも成人の目標を持って、また理づくりの心定めを

してつとめております。また皆さん方も個々に心を定めて、この旬に臨んでおられると思います。

私も三年千日の心定めをいくつかしてありますが、その一つが、芦津の誰よりも勇んで通らせていただく、という心定めです。芦津の誰よりも勇んで通らせていただく、これは考えようによっては難しいことです。

芦津には209カ所の教会がありま
すし、その教会に繋がるようば
く、信者は大勢おられるわけです。そ
の中で誰よりも勇んでといったと
ころで、これは比べようがありま
せん。何をもって勇むのかと思案
したところ、「そうや、おつとめ
や」との思いに至りました。まず
は大教会の月次祭を誰よりも勇ん
で勤めさせていただこう、と心に
誓いました。

毎月おうたを勇んで唱和してお
りますと、気持ちに変化が出てき
ました。それまでは奉仕者の誰か
がお手を間違ったり、鳴物をミス
したりすると、そこに気持ちに向
いてしまい、「なんでこんなところ

で間違うのか。後でどのように注
意をしようか」などと考えること
がありましたし、最後の挨拶のこ
とを考えたり、神殿講話の当日な
どは原稿を開いて内容を確認した
り、また時には他の考え事をした
りなど、明らかにおつとめに集中
していないことが度々あったよう
に思います。

しかし勇んで勤めておりますと、
お手や鳴物の間違いなど一切気に
ならなくなり、おつとめ一点に集
中できるようになったのです。

おつとめで親神様が心のほこり
を払って、胸の掃除をしてくださ
ると聞かせていただきます。おつ
とめに勇むことで心が澄んでくる
のだと思います。毎月の月次祭を
心勇ませて勤めますと、それ以外
のところでも、より勇んだ心でい
ることを自覚するようになりまし
た。本当にありがたいことだと思
います。

おふでさきに、
みなさんではやくつとめをするならバ
そばがいさめバ神もいさむる

と教えていただきますように、お
つとめに勇むことが、お道の勇み
の根本であると思います。

勇んで働く

私がこの勇むことを心定めにし
たのには動機があります。それは、
私の曾祖父にあたる井筒五三郎二
代会長が、就任にあたって心を定
め、生涯の信仰信念にしたのが、
勇むことでした。

二代会長は、梅治郎初代会長様
が下ろした大木の根から、芽を出
し、太い幹に育て、芦津大教会の
盤石の基礎を固められた「真明芦
津の道の中興の祖」とも言うべき
働きをされたのです。しかし、二
代会長の就任は、容易ならざるも
のがありました。

五三郎様は初代の娘、たね様と
結婚をして井筒家の養子になった
のですが、その翌月に梅治郎初代
会長が出直されたのです。本来な
らば養子として迎えた五三郎様が
後を継ぐことに何の不自然もあり
ませんが、梅治郎初代があまりに
も偉大であった故に、井筒家に入

ったばかりの若干24歳の若者に、
初代の後を任せることを不安視す
る者が出てきました。

また当時は、全教的に教勢は順
調に伸びていましたが、一方では
どこの教会も財政困難な状況にあ
りました。芦津も例に漏れず、部
内教会も財政窮乏の底にありまし
た。当時の芦津の教会建物は二番
抵当にまで入っていて、初代のと
よ夫人が賃仕事をして、布教費に
当てて一時をしのいでいるような
有様でした。加えて爆発的に教勢
を伸ばした天理教に脅威を感じた
時の政府が、内務省秘密訓令とい
う名の大弾圧を仕掛けたのが、初
代様が出直した年の春でした。

この困難な状況を若い五三郎に
委ねるわけにはいかない、といっ
た空気があって、約3カ月間は役
員が臨時代理理事として会長職の
代理をしていたのです。

そうしたところにとよ夫人の手
に腫れ物ができ、おちばに帰って
おさしづを伺ったところ、

皆々若き者に凭れて

明治30年3月23日



とのお言葉を頂いたのです。この親神様のお言葉に従えない者などありません。親神様の思召のままに、五三郎様は二代会長に就任したのです。

このように前途多難の船出をした五三郎会長は、困難の節から大きく芽を出されたのですが、就任から一貫した信念は、

『道の歩みに、沈滞は死滅を意味する、勇んで働く、このことがすべてを生かすただ一つの道である、財政の困難を嘆く前に、不足不満を持つ前に、先ず勇んだ心で人のため世のため働かせて貰うこと、難境打開の道はこ

れのみ。』

『眞明普津の道 卷三』 25 頁

というものでした。この信念を固く貫いて、部内教会の修理丹精に、教勢の伸展の上に丹精の限りを尽くされる中、親神様の大きなお働きをいただいて、さまざま苦境を乗り越え、教会数を 5 倍に引き上げられるほど、まさに節から芽を吹く御守護を頂かれたのです。「勇んで働く、このことがすべてを生かすただ一つの道である、財政の困難を嘆く前に、不足不満を持つ前に、先ず勇んだ心で人のため世のため働かせて貰うこと、難境打開の道はこれのみ」との二代会長の信仰信念が、普津の誰よりも三年千日勇んで働くという心を定めさせていただく動機になったのです。

おさしづに、

勇んで掛ければ神が勇む。神が勇めば何処までも世界勇まます。

明治 40 年 5 月 30 日

と教えていただきます。どうか皆様方それぞれも、教会の中で誰よりも一番勇んだようぼくとしてつ

とめていただきたいのです。親神様の勇んだお働きを頂くには自ら勇むより他ありません。勇んで働くよりないのです。

まずは私自身が勇むことで、周囲を勇ませ、ようぼく、信者の皆さんを勇ませ励まして、さらにはここに集まるわれわれが互いに勇ませ合い、励まし合いながら、増しに勇んだ時句の歩みを、共に進ませていただくようではありませんか。

心を引き締めて

年明け早々の元日に、「能登半島地震」という大きな節を見せていただきました。これについて真柱様は、去る 1 月 4 日の年頭ご挨拶の席上、被災者の方々へのお見舞いの言葉を述べられると共に、お

ふでさきで地震などの天災は、月日の残念立腹であると述べられていることを踏まえた上で、

それは、教祖の教えを信じ、教祖の道を通らせていただくお互いの、心の成人の鈍さに対する厳しいお仕込みであると思うの

であります。

『みちのとも』 立教 187 年 2 月号 5 頁

と仰せになり、これまでをよく振り返り、よく思案をして年祭活動の歩みを進めるよう促されたのです。

この震災を、私たち一人ひとりの年祭活動への厳しいお仕込みであると思案し、まずはお互いに心を引き締めて、教祖年祭への歩みを着実に進めたいと思います。

年祭活動 1 年目の昨年は、信仰実践に動くことを目標にしましたが、その動きを継続しながら、2 年目の今年は、「1 教会 2 名以上の初席者の御守護」との具体的な目標に向かって動き、働かせていただきたいのです。

親神様に勇んで働きたい、教祖御存命の理にお導きいただき、所属するようぼく、信者の皆さんと一手一つに心を結んで、心勇んで年祭活動をつとめさせていただきますましう。

どうぞ本年も一年よろしくお願い申し上げます。

(要旨)

何卒この心定めをお受け取り下さいまして、随所で不思議自由の理をお垂れ下され、たすけ一条の御守護と喜びに溢れる時旬の道をお連れ通り下さいまして、陽気ぐらしへの歩みを着実に進めさせて頂けますようお願い申し上げます。

春季大祭 祭典役割																	
胡 三 琴 味 線 弓			小 すり 太 拍 ち 鼓 りが 鼓 子 ゃ ね ね 木 ば ん 笛			地 方			てを どり					扈 者	扈 者	祭 主	
岡 浜 奥 島 田 田 さ た 富 よ つ 美 の え 子			川 山 竹 井 岡 今 畑 本 内 筒 島 川 澄 義 義 文 秀 政 博 範 忠 夫 男 治			奥 守 湯 田 田 川 眞 清 正 治 一 圀			井 前 会 筒 会 長 夫 ち 長 夫 人 ぐ 夫 人			大 井 瀧 教 筒 本 会 敏 眞 長 成 二 二 郎		座りづとめ	加世田 洋	竹内義 忠	大教会 長
榎 河 望 理 合 月 恵 遊 恵 子 喜 美			立 吉 木 瀧 立 西 花 田 村 本 花 本 善 裕 真 庄 善 義 三 和 次 司 文 之			浜 葭 岩 田 内 切 宣 正 義 郎 浩			松 吉 宗 中 梶 本 田 我 村 川 さ 幸 邦 俊 和 だ 子 代 隆 洋			前 半		賛 者	賛 者	指 図 方	
奥 中 岩 田 村 切 千 寿 々 晶 代			湯 吉 今 石 梶 瀧 川 田 川 川 川 本 正 裕 聖 健 芳 亘 信 樹 一 郎 男			村 岡 奥 田 本 田 光 久 正 伸 昭 儀			木 加 山 奥 中 浜 立 村 世 田 村 田 花 理 陽 秀 康 興 宣 善 恵 子 子 紀 正 郎 三			後 半		新 居 里 実	石 川 健 郎	奥 田 正 徳	
大 田 坂 齊 北 松 宗 梶 望 喜 中 井 藤 村 森 我 川 月 信 敏 清 浩 誠 道 芳 慶 人 行 洋 太 明 征 太			瀧 梶 瀧 湯 村 今 西 奥 中 浜 立 本 川 本 川 田 川 本 田 村 田 花 一 和 正 光 聖 興 正 俊 宣 善 郎 亘 信 伸 一 儀 和 郎 三			河 瀧 岩 山 伝 端 本 切 本 供 芳 庄 正 義 雄 司 義 範			湯 川 正 圀 長								

教祖百四十年祭 教会長夫妻

おたすけ推進のつどい

1月24日、教会長とその配偶者、在籍者を対象とする「教祖百四十年祭教会長夫妻おたすけ推進のつどい」（教会長年頭会議）が大教会で開催され、230名（教会長141名、教会長夫人48名、代理13名、在籍者28名）が参加した。

このつどいは、年祭活動2

年目にあたり、教会長及びその配偶者自身のたすけ一条の実践をテーマに「日々のにをいがけ」「積極的なおたすけ」「ちばの理を戴く」の3項目を促す場として本部から打ち



高瀬先生の布教体験に聞き入る

出され、各大教会で本年1月より行われているもの。

午前10時、親神様、教祖、祖霊様を礼拝した後、大教会長が開講挨拶（要旨を6～9頁に掲載）。

続いて、ご本部が作成した内統領・宮森与一郎先生のメッセージビデオ、また句の声を受けて実動する2人の教会長を取り上げたビデオを視聴した。

次に、小南部大教会部属法奥金澤分教会前会長・高瀬徹先生の講話。先生は自らの布教経験を中心に、日々のにをいがけで真実の種を蒔くことの大切さ、道の路銀であるおさづけの理の尊さを述べられた。

さらに、現状の教勢の低下はにをいがけを疎かにしている結果であるとし、教会長夫妻ににをいがけ実動に励むよう奮起を促された。

その後、昼食をとり、午後の部が開始。八木香織・東大屋分教会長、菊池和彦・大関門分教会長による感話。それぞれ自身の通ってこられた経

験を真剣に話された。

この後、食堂、陽気ホールに移動し、31班に分かれてねりあい。年祭活動1年目の振り返りや、個人や教会で行っているにをいがけ活動、信者への丹精などについて話し合い、本年の目標に向かってどのように取り組んでいくかをねりあった。

終了後、神殿に移動し、よろづよ八首を総立ちでつとめ、山田道弘役員の閉講挨拶の後、親神様、教祖、祖霊様を礼拝し閉講した。

閉講後、食堂に場所を移し、直会。恒例の干支の湯飲みの贈呈、福引などを行い、和やかな時を過ごした。



辰年の教会長に湯飲みの贈呈

喜びの奉告祭

神殿移転奉告祭

紀船分教会

日方部属・紀船分教会（岡秀人会長・和歌山県海南市）は、1月21日、大教会長をお迎えして、神殿移転奉告祭を執り行った。参拝者は50名。

紀船の道は、大正12年紀船宣教所として理のお許しを戴き、大正14年に建築された教会を足場に今日までたすけ一条の御用に勤めてきた。しかし100年の年月を経て、建物の老朽化に合わせ、度重なる自然災害で傷みが激しくなったことから、このたび移転のお許しを戴き、前日の20日に鎮座祭を執り行った。

午前10時、岡会長の祭文奏上に続いて、大教会長が挨拶。御恩報じの心を養っていくところが教会であると話を進め、「陽気ぐらしの手本ひながたである教会を目指して、それぞれに与えられた役割を見つけて、一手一つに歩みを進め



てほしい」と望まれた。

おつとめを勤めた後、挨拶に立った岡会長は、移転に際し支えてくれた方々への感謝を述べ、「この新しい土地で陽気ぐらしの道場となれるよう、理の栄えをお見せいただけるよう、御恩報じに努めたい」と決意を述べた。

その後、記念撮影をして、直会。参拝場を埋め尽くした参拝者の笑顔が、喜びの日に花を添えた。



学生参拝デー・卒業生送別会

1月21日、芦津学生会（森道治委員長）は親里で、「学生参拝デー」と「卒業生送別会」を実施し、高校生8名、大学生10名が参加した。

午前11時、本部北礼拝場に集合し、参拝。西回廊で回廊拭きひのきしんを行った後、11時30分からの本部のお願いづくめに参拝した。

その後、詰所に移動し、卒業生送別会を開催。全員で会食し、最後に高校、大学、専門学校を卒業する生徒へ記念

品を贈呈した。そして、卒業生一人ひとりが進路の報告と今後の抱負、また御礼の言葉を語った。

芦津学生会は、3月27日に、大教会からおちばに向けて徒歩団参を実施する。翌28日は、ご本部の「春の学生おちばがえり」式典に参加、午後からは詰所で直属アワーを開催する予定。

登 用

【准婦人】

梶川 正美

立教187年1月23日

教務部報

おさづけの理拝戴《12月》

石川 正美（直轄）

初席《12月》

《6名》日方

《2名》直轄

《1名》芦玉、芦明德

《順序運びより 10名》

項 目 名 称 () 内教会数	初 席	の お 理 さ 拝 づ 戴 け	修 養 科 修 了	教 人
大 教 会 (1)	12	11	3	
東 津 (13)	2		1	
吉 野 (23)		1	1	2
島 川 (29)	4	2	2	
日 原 (16)	7	2	2	3
稗 方 (15)	9	1	2	4
本 島 (7)	4			
日 津 (2)				
始 高 (2)				
津 良 (5)				
門 和 (12)	3			
當 司 (6)	6	2		2
大 別 (6)				
沖 島 (26)	21	7	5	
尼 縄 (3)	1			
四 崎 (2)				
大 ツ 山 (5)		1	1	
島 冠 (2)				
天 下 (1)	1			
青 保 山 (3)				
芦 木 (1)				
甲 浪 (1)	1			
芦 邊 (1)		1		
天 華 (1)				
入 津 (1)				
豊 江 (1)				
紀 野 (1)		1		
勝 周 (3)	2	2		
神 明 (1)				
神 の 島 (1)	1			
兵庫眞洲 (1)				
芦 ノ 郷 (2)	4			
本 明 勇 (2)	2			
明 道 (1)				
芦 東 (1)				
和 鎮 (3)	2	2		
神 滝 本 (1)				
芦 明 徳 (1)	2	1		
眞明彰化 (2)	7	3		1
本 氣 (2)	1			
芦 明 照 (1)				
眞 伯 (1)	1			
合 計 (209)	93	37	17	12

年間統計（自令和5年1月1日）至令和5年12月31日）

次代を担う道の後継者を 共に育てよう！ 道の後継者の集いⅢ

教祖にお喜びいただける成人を目指して
～自分にできるおたすけ～

第一次：8/24（土）～25（日）

第二次：8/31（土）～9/1（日）

第三次：10/5（土）～6（日）

※1日目 11:30 受付、2日目 11:30 解散

対象：18才～48才のようぼく・信者子弟
場所：芦津詰所

内容：ビデオ、グループワーク、懇親会など
申込は2/23～5/23まで